

「イエシュアの栄光」

ヨハネの福音書 12:27~50

はじめに

前回のメッセージで、過ぎ越しの祭りを間近に控えたエルサレムの街にやって来られたイエシュアと弟子たちについて学びました。イエシュアは子ろばに乗られ、人々は「ダビデの子、ホサナ。」すなわち「メシアよ、私たちを救ってください。」と叫び、しゅろの枝を持ってイエシュアを迎えました。その中にいく人かのギリシャ人がおり、イエシュアとの面会を求めて弟子のピリポ、そしてアンデレのもとにやって来ました。ギリシャ人とはすなわち異邦人、イスラエル人の対局に位置する存在であり、イスラエルにとって敵とさえ見なされる存在であり、私たち日本人もイスラエル人から見れば、このギリシャ人と同じ異邦人となります。その異邦人が、イスラエルの祭りのためにエルサレムの街に上って来たということは、彼らは異邦人でありながら、イスラエルの神様を自分の神様として信じた者たちだと考えられます。イスラエルの神様を信じた異邦人である、この幾人かのギリシャ人がピリポとアンデレ、すなわちイエシュアの弟子を介してイエシュアのもとに引き寄せられました。これを見てイエシュアは次のように言われました。

12:23 「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」

とイエシュアは宣言なされ、この異邦人であるギリシャ人たちに対して、かつて弟子たち言われたと同じように

12:26 「…わたしについて来なさい。」

と語られました。この出来事は非常に重要な出来事と考えなければなりません。なぜならば、イエシュアはこの出来事を見て「心が騒いでいる」と語っておられるからです。

1. 騒いでいる

12:27 今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ。この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。

「騒いでいる」、ヘブル語でバーハル(בָּהָל)と言います。この言葉が聖書で最初に使われるのが創世記 45:3 の場面です。

創世記

45:3 ヨセフは兄弟たちに言った。「私はヨセフです。父上はお元気ですか。」兄弟たちはヨセフを前にして驚きのあまり、答えることができなかった。

この場面は、自分たちが奴隷として売り飛ばした弟のヨセフが、数年後にエジプトの総理大臣となって目の前に現れ、再び一堂に会する、「出会う」こととなった時のヤコブの息子たちの様子を描いたものですが、彼らは言葉を失うほどに驚いたことが記されています。この「驚き」がバーハルです。この出来事が示すように、

バーハルには「出会う」ことにおける「驚き」という概念が込められていると考えられ、イエシュアに会うために、弟子であるピリポとアンデレに出会ったギリシャ人たちが、イエシュアによって、まるで兄弟のように一つにされることが示されていると考えられます。ユダヤ人たちが「ホサナ（どうかお救い下さい）」と叫んだことを受けて『わたしをお救い下さい』と言おうか』と言いつつも、「いや」とそれを否定されました。イエシュアが提示する「救い」とは、イスラエルに、イスラエルの神様を信じる異邦人が、イエシュアに「ついて行く」、聞き従う民として繋がれることであり、それが、イエシュアに会うためにピリポとアンデレに会いに来たギリシャ人たちの、この出来事の中に型として表されていることを指して「このためにこそ、わたしは、この時に至った」と語られたと考えられます。一般的に「救い」とは、何か困難な状況から、危険から助け出される、守られることを意味します。神様は確かに私たち人間を、永遠の滅びに向かう定めから「救う」というご計画をお持ちです。そのご計画が具体的にどのような形で実現するのかがここに示されているのです。すなわちイスラエル人に、異邦人がつなぎ合わされる時です。前回の 12:20~22 でギリシャ人たちの方がイスラエル人、ユダヤ人であるピリポとアンデレに会いに行っていることがそれを指し示す型です。イエシュアはやがてこの地上に帰って来られます。その目的はイスラエル王国を再興し、そこにすべての異邦人の国々が従う形で、世界を一つにすることです。これがイエシュアの言われる「救い」であり、神様のご計画の完成です。ですから私たち異邦人は、イスラエルにつなぎ合わされる者として、イスラエルについて知る必要があるのです。聖書はすべてイスラエル人によって書かれました。旧約聖書はイスラエルについての歴史書、預言書であり、新約聖書はその土台の上に成り立っています。つまり聖書を学ぶとは、イスラエルについて学ぶことであり、イスラエルに対して神様が何をなし、何をなそうとされているのかを学ぶことなのです。

2. 栄光

12:28 父よ。御名の栄光を現してください。」そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。」

12:29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話したのだ」と言った。

イエシュアが「父よ」と言っておられるにも関わらず、そばにいた群衆はその声を「雷が鳴った」とか「御使い」の声だとか誤解しています。ここにも一つの真理が表されています。つまりイエシュアを信じなければ御父である神様が解らないということです。イエシュアを信じなければ、そして知らなければ、それが御父である神様からのものであるのか、そうでないのかということを見分ける、聞き分けることができません。なぜなら御父と御子とはひとつだからです。

12:30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためです。」

12:31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。

イエシュアが御父に向かって「栄光を現してください」と言われました。御父である神様はそれに対し「すでに現したし、またもう一度現そう」とお答えになりました。この「栄光」とは一体何でしょうか。イエシュアはこれを「わたしのためではなくて、あなたがたのため」であり、そして「この世のさばき」に関係があることを述べておられます。「栄光」はヘブル語でカーヴォード(דְבָרָה)と言う名詞で、カーヴァド(כָּבֵד)「重い、

激しい、重んじる、」という意味の動詞からなっています。このカーヴァドが聖書で初めて使われるのが創世記 18:20 です。

創世記

18:20 そこで主は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。

これは天から降る火によって滅ぼされた町、ソドムとゴモラについての記述です。その罪の重さを表す言葉としてカーヴァドが使われています。神様はこの町に住んでいたロトと二人の娘をあわれみによって救い、それ以外の者すべてを滅ぼし、裁かれました。このようにカーヴァドには「裁き」の概念があり、それがカーヴァード「栄光」の一側面であると考えられます。ですからイエシュアが言われた「栄光」とは「裁き」と密接な関係があることが解ります。そのためイエシュアは 12:28 で「栄光を現してください」と言われた直後、12:31 で「今がこの世のさばきです」と言われたと考えられます。またカーヴァドには他に「かたくなにする、強情にする」という意味もあります。

出エジプト

9:7 …それでも、パロの心は強情で、民を行かせなかった。

イスラエルの民がエジプトの奴隷だった時代、神様はモーセを通して多くの奇蹟、エジプトに大きな災害をもたらしました。それにも関わらずエジプトの王パロの心は神様に対して強情であった、神様によってかたくなにされたことが記されています。このエジプトを「支配する者」であったパロのように、イエシュアを信じず、受け入れず、カーヴァド、すなわちかたくなにされた者たちは、裁かれ、「追い出される」ことが語られています。このように、神様が「栄光」を現す背景には、必ず人の神様に対する「かたくな」な心があり、そしてそれを打ち砕く、すなわち「裁き」があることが解ります。

3. たとえ

12:32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」

12:33 イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。

イエシュアはここでご自分の死について語っておられます。「地上から上げられる死に方」、これは十字架を意味していると考えられますが、本来イスラエルの死罪にあたる処刑の方法は石打ちです。また罪の贖いとしてのいけにえを殺す方法は火で燃やすという方法がとられています。イエシュアは確かにイスラエルの罪の贖いとして殺されるのですが、その方法は十字架刑という、当時のローマ、つまり異邦人のやり方で殺されることを宣言されました。それはイスラエルも、そして異邦人も「すべての人を引き寄せる」ためであると語っておられます。ユダヤ人としてお生まれになり、ユダヤ人と異邦人が混ざり合った地域であるガリラヤでその生涯のほとんどの時間を過ごされ、そして十字架刑、すなわち異邦人によって処刑されるという、このイエシュアの公生涯の中に、「すべての人」、つまりイスラエル人と異邦人を結び合わせる意図があることが示されていると考えられます。

12:34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは、律法で、キリストはいつまでも生きておられると聞きましたが、どうしてあなたは、人の子は上げられなければならない、と言われるのですか。その人の子とはだれですか。」

「人の子」とは、「ダビデの子」と同じくイエシュアを指し示すメシアの別称です。ユダヤ人たちは「人の子」についての預言にこう記されているのを知っていたと考えられます

イザヤ書

9:6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

人の子は「今より、とこしえまで」イスラエルを治められることが信じられていました。この預言はたしかにメシアであるイエシュアを指し示すものです。つまりこの事は必ず成就します。しかしその前に、決して避けては通れない重要な真理が、彼らの目には隠されていました。それはもちろんイスラエルの罪の贖いのいけにえとしての人の子の存在、すなわち十字架です。

12:35 イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。

12:36 あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された。

ユダヤ人たちが「人の子とはだれですか」と質問しているにもかかわらず、イエシュアはたとえで話され、はっきりとお答えになりません。つまりここに「立ち去って…身を隠された」と記されているように、答えを「隠された」のです。普通一般的なたとえ話とは、伝えたい内容や意味を解りやすく説明するために用いられます。しかしイエシュアの場合はその逆です。隠すため、つまり解りにくくするために用いるのです。その理由がマタイ 13:13 に記されています。

マタイ

13:13 わたしが彼らにたとえで話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。

語っても聞かない、聞いても信じない、悟らない者に対して、たとえで語る、この手法は旧約聖書の中で頻繁に使われています。特にそれは預言者たちによってなされましたが、この旧約の預言者たちの存在自体がメシアをたとえていることが多くありました。また祭司や王などの指導者たちもそうであり、さらには旧約聖書全体が、イスラエル、ユダヤ人という具体的な存在とその歴史や物語の中に、神様の御心、そのご計画を隠した一つの壮大なたとえ話、すなわち「型」と言えます。またこのヨハネの福音書についてもそうであるというのが、私が今回この書の講解をしていて強く思わされているところです。しかし隠されていると言っても、すべ

ての人に対して隠されているわけではありません。

マルコ

4:33 イエスは、このように多くのたとえで、彼らの聞く力に応じて、みことばを話された。

4:34 たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた。

このように、聖書のたとえは、イエシュアの弟子に対してはすべて啓示、すなわち解き明かされることが記されています。今日に至るまで 2479 の言語に翻訳され、推定発行部数約 3880 億冊、現在も毎年 6 億冊以上販売または配布され続けていると言われる、まさに「永遠のベストセラー」である聖書。それだけ多くの人の手に渡り、読まれ、また研究されているということですが、そこに隠された意味を知ることができるのは「イエシュアの弟子」に限定されています。つまり聖書のたとえには、イエシュアの弟子と、そうでない者とを分ける、区別する、すなわち「裁く」という目的があると考えられます。

12:37 イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。
「彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしない」ためにイエシュアを信じることができませんでした。それは彼らが誰よりも罪深く、また頭が悪かったからではありません。神様によって「隠されて」いるからです。神様が意図的に隠されたものを、人の力や知恵で見つけることができるのでしょうか。聖書の専門家であるユダヤ人の指導者たちの目に、それは隠され、彼らの心をかたくなにされました。その理由が、イザヤの預言が成就するためであったと次に記されています。

12:38 それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。

この預言の全体を見てみたいと思います。イザヤ書 53:1 からの預言です。

イザヤ書

53:1 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。

53:2 彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

53:3 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。

53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちが思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちがいやされた。

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほぶり場に引かれて行く羊のように、毛を刈

る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

53:8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

53:9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。

53:10 しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は未長く、子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。

53:11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。

53:12 それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。

これがユダヤ人たちの目に、イエシュアが、神様のご計画が隠されたことの原因です。「主のみこころは彼によって成し遂げられる」ためであることが述べられています。人の力や知恵や、他のどんな存在によってでもなく、ただ「彼によって」すなわちイエシュアただお一人によって神様のご計画が成し遂げられるためです。

12:39 彼らが信じるができなかったのは、イザヤがまた次のように言ったからである。

12:40 「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。」

これはイザヤ書 6:10 からの引用です。

イザヤ書

6:9 すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』

6:10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」

ここで「耳を遠くし」と訳されているのが、初めに述べた「栄光」カーヴオードの語源カーヴァドです。イザヤはこの御言葉にイエシュアの「栄光を見た」と言っています。

12:41 イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。

「栄光」カーヴオードと「耳を遠くする」カーヴァドのヘブル語における結びつき、関係性を見てイザヤはイエシュアの「栄光」と言ったのだと考えられます。「自分で…立ち返っていやされる」のではなく、ただイエシュアお一人によってそれが成されるためにイエシュアだけに「栄光」カーヴオードが与えられるために、人の耳がカーヴァド「耳が遠くされる」、心がかたくなにされることがここに表されていると考えられます。

4. 義と救い

12:42 しかし、それにもかかわらず、指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちははばかりで、告白はしなかった。会堂から追放されないためであった。

ここにイエシュアを信じて告白しなかったユダヤ人の指導者たちがいたことが記されています。彼らの存在は、何を物語っているのでしょうか。ローマ人への手紙でパウロがこのように記しています。

ローマ人への手紙

10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

この御言葉によれば、このユダヤ人の指導者たちはイエシュアを信じて義と認められたが、口で告白していないので、彼らの救いは完成していないということになります。しかし神様に義と認められた者は決して捨てられません。つまりこれもまた一つの型です。すなわち神様に義と認められたアブラハムの子孫であるイスラエル、ユダヤ人は義と認められ、決して捨てられるのではない、しかし彼らの救いはまだ完成していない、ということが表されていると考えられます。彼らの救いが完成するのはイエシュアが十字架にかかれる時ではなく、イエシュアが地上再臨される時だからです。

12:43 彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである。

ここでは「栄誉」と訳されていますが、ヘブル語ではカーヴォードで「栄光」です。それが「神からの」と「人の」という二つの「栄光」があることが解ります。人の栄誉、栄光は、人に救いをもたらすことはできません。つまり「自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのない」もの、自分で自分を救うことができないのが人の栄光だということです。神様の栄光、イエシュアの栄光はイスラエルとそれにつながる異邦人に救いをもたらすものです。しかし彼らは神の栄光よりも人の栄誉を愛した、重んじたためにこの時点での救いが完成されなかったことがここで説明されています。

5. 遣わした方

12:44 また、イエスは大声で言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わした方を信じるのです。

12:45 また、わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのです。

このようにイエシュアは終始一貫して、ご自分が「遣わされた者」であり、遣わした方に目を向けることを強調されています。イエシュアはその方の意向に全く同意しておられ、遣わした方、すなわち御父である神様と全く一つであることを、ここでも大声で主張されています。ですから私たちもこのお方に目を向けましょう。イエシュアを遣わしたお方に祈り、礼拝しましょう。イエシュアがその模範、最高のお手本です。イエシュアがそうされたように、私たちも御父である神様、天の父なる神様に心を向けましょう。

12:46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。

イエシュアを信じる者が、誰一人として「やみの中にとどまることのない」、つまり「光の中にとどまる」ためにイエシュアはこの地に来られました。イエシュアを信じるか信じないか、これが光とやみ、すなわち救いと滅びの分かれ道になります。

6. 聞く

12:47 だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。

ここでの強調点は「聞く」ということです。イエシュアの言葉を「聞いてそれを守らなくても」とは、言い換えるならば「守れなくても聞くなれば」です。「守る」こと、つまり何かを行うことよりも、まず「聞く」ことが重要なのです。

Iサム 15:22 するとサムエルは言った。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。

神様は私たちが「聞く」ことを何よりも喜ばれます。神様に喜ばれたいなら「聞く」べきです。私たち教会は、神様を賛美したり、祈ったり、人と交わったり、奉仕をしたりすることよりも、御言葉を「聞く」ことを大切にしましょう。私たちは御言葉に「耳を傾ける」ために集められていることを覚えましょう。

12:48 わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。

「聞く」ことが重要だと述べました。しかしたとえ聞いたとしても、それを拒絶、否定して「受け入れない」、真実だと認めない、つまり「アーメン」であると信じないならば、さばかれます。「わたしが話したことば」とは、イエシュアを遣わしたお方、御父の言葉であり、その御心であり、お定めになったご計画です。それに従ってさばかれるということです。イエシュアはそれに全く同意しておられ、御父と御子が一つであることをここでも強調しておられます。

7. 御父と御子

12:49 わたしは、自分から話したのではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。

ここに御父と御子の関係がはっきりと記されています。それは遣わす者と遣わされる者の関係であり、「命じる者と従う者」の関係であるということです。すなわち御父が全てを命じ、御子がそれに全き従順をもって従う関係です。この関係によって、御父と御子とは一つであるということが示されています。

12:50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」

しかしイエシュアは、御子は御父である神様の、その命令に対して奴隷や召使いのように従うのではありません。イエシュアは「わたしは…知っている」と言われるように、その御父の命令の本質、その意味を、つまり御父の考えておられることを全て聞かされ、知り、理解し、そして全く同意した上で従っておられることが解ります。つまりそこには親しい交わり、いうなれば綿密な打ち合わせがあったということです。その打ち合わせによって御子イエシュアは御父のお考え、ご計画の本質を理解し、それが「永遠のいのち」であることを「知られた」ということです。

8. 永遠のいのち

ではこの「永遠のいのち」について改めて考えてみたいと思います。永遠のいのちとは一体何でしょうか。それは文字通りに、死ぬことがなく、永遠に生きることを意味するのでしょうか。まずこの永遠のいのちはイエシュアを信じることによって与えられることが記されています。

ヨハネ

3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

3:16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

イエシュアを信じる者だけが永遠のいのちを持つことができます。そしてそれは「救い」と同義であることが記されています。では永遠のいのちとは、イエシュアを信じることによって死ぬことがなくなることなのでしょうか。死についてこのように述べられています。

I コリント

15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。

15:25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。

15:26 最後の敵である死も滅ぼされます。

イエシュアを信じる者だけが死ななくなるわけではありません。「死」という存在そのものが滅ぼされる、なくなってしまうのです。これによってもたらされる結果はすなわち死のない世界、「誰も死ななくなる」という世界です。またこのように述べられています。

I コリント

15:53 朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。

このように、死ぬ者は必ず不死を着る、つまりすべての者、すなわちイエシュアを信じる者にもそうでない者

にも等しく必ず朽ちない身体が与えられることが記されています。永遠のいのちは誰にでも与えられるものではなく、イエシュアを信じる者にのみ与えられるものなので、永遠のいのちとは、朽ちない身体のことではないということになります。朽ちない身体、不死の肉体は全ての人に与えられます。イエシュアを受け入れなかった者、信じなかった者にもそれは与えられるのです。

黙示録

20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

20:12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。

20:13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。

20:14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

20:15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

いのちの書に名の記されていない者、すなわちイエシュアを信じなかった者は、朽ちない身体に生き返らされて火の池に投げ込まれます。人は身体があるから痛みを感じ、苦しいと感じるのです。この身体が朽ち果て、死んでしまえば痛みや苦しみから解放されるのですが、死が滅ぼされ、なくなってしまうので、「第二の死」と呼ばれているものの、もはや死ぬということがありません。そして皮肉なことに身体は朽ちることがないので、永遠に苦しむこととなります。この者たちにとっては朽ちない身体は、永遠に苦しみを味わうための肉体となります。ダニエル書ではこれを永遠のいのちに対して、「そしりと永遠の忌み」と呼んでいます。

ダニエル

12:2 地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。

「そしりと永遠の忌み」が火の池に投げ込まれる「第二の死」を意味するならば、永遠のいのちが意味するものはこれしかありません。

黙示録

20:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

キリストすなわちメシアであるイエシュアとともに、千年の間王となる、いわゆる「千年王国」、これが永遠のいのちが意味するものだと考えられます。このように、永遠のいのちとは、神様の国、御国である「千年王国」において、その王であるイエシュアとともにある、ともに住むことであると言えます。そしてこの永遠のいのちは、その後によって来る「新しい天と地」新しいエルサレムにつながっています。

黙示録

21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

21:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

21:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

すべての涙はぬぐわれ、死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない、つまり永遠に、喜び、笑い、楽しむ世界、何より神様がともに住まわれます。これ以上の守りがあるでしょうか。何一つ欠けたところのない完全な世界、それを味わうことが、イエシュアの言われた「永遠のいのち」であると考えられます。ただ永遠に生きること、死なないことが「永遠のいのち」であるなら、それは永遠に苦しむことをも意味します。ですから重要なのはどこで生きるか、どこに住むかです。つまりそれは神様の国、御国に入ることであり、御国に住むことが「永遠のいのち」なのです。このように「永遠のいのち」とは、神様の国、御国に住むことであると結論づけることができます。今日も「御国が来ますように」と、御国を思い、憧れ、待ち望んでまいりましょう。